

六

花



3

2023

りっかはいくかい

とり貝

山田 六甲

貝寄風の室津にねばる日暮かな
春月の津を離^さりゆく夢の舟
涅槃の日足濡れて猫もどり来し
船路地に三毛猫五体投地かな
室津へと春待舟のもどり波
子猫鳴く橋のたもとの船だまり
鳥貝を叩き付けたる女将かな
立春の髪へ月光降りきたる
友君の墓碑に春月光の影

天守閣仰がば春の雪暗し
にこごりやせせりて鯛の鯛舌に
草もゆる舟待ちの津の坂がかり
春の雪淡く足跡美人かな
津の路地に鱈を焼ける匂ひかな
すこやかに熟れ五十昭の夏みかん
臥龍梅蝶一頭に花ひらく
猫の日の翡翠の色や涅槃の日
涅槃砂猫の足跡幾重にも
猫の日のいやがる猫の足ぬぐふ

二月三日

灯ともせば昏るる早さや十二月 善野 行

「つるべ落とし」は秋の季語、「他の季節に比べて秋は急速に日が暮れるのが早い」ということを表すことわざだがそれは屋外のこと。この句は部屋を灯したことによって日の暮れの早さを感じたことで常識の逆転が起こり日暮れの速さを感じたという微妙な句。作者は詩的独創感覚を磨いている途中。

(六甲)

大碓して福笑出来上がり 谷口一献

「福笑いゲーム」が仕上げにあと一步のところ、大きなくしゃみをしてだめになったというのでなく、できあがったという逆転発想のユーモアと諧謔が実に面白い。記録と記憶の作品。(六甲)

家出することもなくなり竈猫 江見 巖

「かまどねこ」は寒くなって竈の残ったぬくもりに暖を取って居眠る猫で、高齢のためか家出もしなくなったという心配と安堵がこもごも。今ならストーブの前にいる暖炉猫というところか。

昔は煮炊きの終わった竈に残るぬくもりを求めて竈の中で猫が眠っていたことが多く、中には火を入れられて危うく焼けそうになった猫もいたらしい。小林一茶は猫が好きなのか嫌いなのか猫の句を340句も遺している。(六甲)

今月は三句とも佳かったので異例の夢風撰巻頭三句になったのが主宰としては嬉しい。

いえですることなくなりかまどねこ

雪嶺抄

己がしづき ◎ 笹村 政子

水底の空より銀杏落葉降る

店裏の売るつもりなき吊し柿

今日殊に色深めぬる石蓐の花

初鴨の己がしづきをかぶりけり

冬耕の鋤きらきらと振り下ろす

玉子屋もタオル屋も映え冬夕焼

面打つ鎚のきこゆる白障子

見えぬまま声の移れる笹子かな

賜はりし齢おそろし返り花

杖ついて亡き夫とぬる初時雨

初鴨の己がしづきをかぶりけり

はつがものおのがしづきをかぶりけり
この冬始めて飛来した鴨が着水した瞬間を捉え、写真でいえばシャッターチャンス。着水の瞬間に立てた水しづきがその鴨に降りかかり、鴨はその飲待の飛沫に飾られた。鴨は相当の長距離飛行で疲れていたはずで、飛行の熱を冷ますかのようにであり、シャパンをふりかけられた様にも見えるが作者の眼には、湖か河に飲待されたようだ。と見えたのだろう。句も簡潔で覚え易い。▽同時作「冬耕」の鋤の光も振りかぶった瞬間を写生している。打つ前の鋤は少し錆びていたかもしれないが、畑土に振り込むごとに磨かれて光ってきたのだろう。それを捉えた眼力が佳い▽玉子屋やタオル屋を題材にした句には軽みがあり、白障子を通して部屋の中で面を打つ槌音が聞こえていると見えないモノを見えるように表現。見ていて見えないものの逆で、こういう心眼が俳句には必要であると先達は説いている。▽「水底の空より銀杏落葉降る」は鏡のような水面に写った空からイチヨウ落葉が水面へ登ってきたと逆転して見えた。その気づきが素晴らしい。夢風撰。初時雨の句、政子のご主人のことを詠んだ句はめずらしく、回想の光景。「杖ついて」というのがしみじみと伝わってくる。味わいぶかい。

柿落葉 ◎ 志方 章子

花八手咲いて淋しくなりにけり
 冬晴やけふといふ日を逃がさじと
 柿落葉踏みてゆくには惜しかりき
 紅葉散るただそれだけで心病む
 ラフランスとろりと甘き三時かな
 浅漬のあらば幸せなる夕餉
 短日や夫の在らねば急がずも
 凧に夫の在処を尋ねけり
 寒卵の黄味盛りあがりぬる朝餉
 夢を見てゐるやうに銀杏の散りにけり

はまなす抄

かんむりかいつぶり ◎ 升田ヤス子

新しき句友を得たり残る虫
 菊運ぶ車の下にはたづみ
 揺れてゐてどこか頑な冬薔薇
 コンビニの聖菓に夫の見舞ひくる
 綿虫か絮か狭庭にただよへる
 夕照に浮かぶ黒点かいつぶり
 かいつぶり古墳沈むと聞くあたり
姉が好きだった冠かいつぶり
 浜風を切つてかんむりかいつぶり
 さびしさの笛に夫呼ぶかいつぶり
 蘭の花飾る姉さま蝶になれ

柿落葉踏みてゆくには惜しかりき

かきおちばふみてゆくにはおしかりき

柿落葉は美しい。それを踏んで歩くのは、絵踏みのようにも感じて踏みためらう。「かり」は、形容詞の連用形活用語尾、「き」は、過去助動詞「き」の連体形。

「形容詞」った」という意味。また俳句には「審美眼」を必要とする六甲の考えにも適う▽浅漬けがあれば夕餉も事足りる、というのは六甲も。最近家内の介護で買物にも付いて行くようになった。が、あれもこれもと買うので心配になる。「ぼくはご飯と漬物か梅干しがあればいい」と思えるのに。でも家内はあれもこれもとやはり買う。懐具合が心配になるが「私は貧乏嬢ちゃんだからと平然としている▽こがらしの句、凧が吹けば不安になって今頃亡くなった夫はどこに、と夫に訊きたくなる。そこを言わず在処はどこ、と凧を擬人化してみた。夫ロス（喪心）は消えないとある人も訴えている。▽夢を見ているようだ」と銀杏の降る情景を眺めている。「夢のよう」というのは、ポストロムという人は「仮想現実（VR）に生きているだけで、この世界は意識（イデア）がつくっている」というのだが。織田信長も「夢幻の云々」と舞ったよね。

蘭の花飾る姉さま蝶になれ

らんのはななざるあねさまちようになれ
 蘭の花の作品。姉上のエッセイ「蝶は消えた」というのがあり、その蝶に喪心を通わせた追悼句。姉上のエッセイを転載したいと思い、作品20句を掲載させていただいた。また姉上のエッセイに蝶の話がでてくる。今月同時作「浜風を切つてかんむりかいつぶり」は前書きにあるように昨年亡くなった姉上の好きだった冠鳩を掲句で初めて知った。ネットで調べてみると、なんと甲子園の浜にもいるという。姉上の影響でヤス子は俳句を始めたようなことを聞いたし、尊敬もしていて母親のような存在であったという。姉上の遺作と蝶のエッセイを掲載。一読やはり実力の俳人であったと感銘。蘭は東洋蘭で秋の季語。

十二月 ◎ 善野 行

自らを待みゆくのみ麦芽ぐむ
 小春日や教へ子母となりて来し
 鳶の輪に笛の後るる冬日和
 冬麗や鷺会心の声ひとつ
 大池の土手へと尽きぬ枯野道
 闇に火を点し始まる聖夜劇
 灯ともせば昏るる早さや十二月
 極月や逝かれし人へ余せる語
 道尽きて冬の瀬戸内ありにけり
 時雨るるやフェリー乗場の古飯屋

別府抄

尉 鷓 ◎ 廣畑 育子

蕎麦の花咲きて見晴らし良き所
 杜氏らの挿す杉玉の緑濃き
 今年酒杉の小枝を箸置きに
 公園のカランにしばし尉鷓
 黄落の黒き大樹に降り注ぐ
 雅子妃を待つ沿道や冬うらら
 冬麗の沿道に振る小旗かな
 周濠の真青なる空真弓の実
 軽やかに冬の柄長の小群かな
 教会の庭に聖夜の明かりかな

灯ともせば昏るる早さや十二月

ひともせばくるるはやさやじゆうにがつ
 夕暮れになって電灯を点けると、ふと日の暮れが
 早くなった実感が湧いてきた。当たり前の話のよう
 で微妙な感情が潜んでいて佳い。夢風撰。

麦めぐむの作品はこれからの決意も含んでいると
 思う。一誌を持てば、自らの評価はだれがしてくれ
 るか、無視されるかで、自分を信じて進むのみ。自
 分の作品の評価をしてくれないと結社を変える人はそ
 れまでの人。自分を自身で鼓舞出来る人のみ俳句の
 道を進め極める。極月とは十二月のことで、月が極
 まって、その年を振り返ることも多い。「醒睡笑」に、
 「見苦しうなるいはれに一年中のきはまり月をしは
 すとはいふならん」とある。醒睡笑には落語の元にな
 った話も載る。「余せる語」というのは「言い残
 した、言えば良かった」と悔いの残る、恩師への追
 悼句か。時雨の句、昨年末小豆島へ行ったというか
 らそのときの情景句。「古飯屋」という表現に郷愁
 的味わいがある。麦芽ぐむの句は一家の長としての
 決意か。

公園のカランにしばし尉鷓

こうえんのからんにしばしじょうびたき
 「尉鷓」(じょうびたき) はスズメ目ツグミ科の小
 鳥。全長約14センチで、翼に白斑がある。雄は頭
 が灰色、顔からのどが黒、胸以下が赤褐色。アジア
 東部で繁殖し、日本では冬鳥として全国で見られる。
 モンツキとも。渡り鳥のヒタキが公園に来て、公園
 のカランから水がでるのを期待してかしばらく遊ん
 でいる。見慣れると愛くるしいしぐさに見える小鳥
 で、白斑が翼にあるから、すぐ見分けがつく。私は
 この鳥を最近五年ほど前まで知らなかった。名前を
 知るとより親しくなって、姿をみるとしばらく眺め
 ていることが多い。植物や小動物に詳しい育子らし
 い作品。雅子様が来加されたときの様子を句に詠ん
 でおくといつ頃かが分かり、後々まで記憶に残る。

仕返り花 ◎ 永田万年青

山門のわき数輪の帰り花

終活の支度進まず返り花

帰り花巽櫓の裾に来て

背中にリツク諸手に荷物なる小春

洗濯機フル回転の小春かな

小春日や列をなしたる駐車場

小春日や海に誘はれ椅子に坐す

枯草の弾力脚に伝はりぬ

池端に一本真赤なる紅葉

影冴ゆる肩の大きく揺れてゐし

枯草の弾力脚に伝はりぬ

かれくさのだんりよくあしにつたわりぬ
脚の不自由な作者には、固い地面のはずが枯草の弾力を感じて雲を踏むようで心地よかつたのだろう。それは足の感受性が強くなっているせいであろうか。私も昔スキーで脚を怪我したとき、通常の地面を歩く硬さが傷に響いてつらかつたし、枯草の上を歩くときに、その柔らかさがありがたかつた。「小春」の句、冬の初めの、春に似た温暖な気候でその小春の陽気に誘われて海岸まで足をのばして遠くをながめているのだろう。風もなく海岸にいて落ち着く作者は長年六花の会計をしてくれた。その大変な仕事をとどこおりなく勤めて貰ったことに深く感謝。ただし句会の総責任者はこれからもしてくれる。

もちろん ◎ 出口 誠

家の中温度が低し冬うらら

冬うらら実家に六花持つて行く

歌はなきややつてられない冬の宵

店までの距離を歌へる冬の宵

帰りにももちろん歌ふ冬の宵

冬の宵歩きながらに歌ひけり

いつの間に雲に覆はる冬の空

冬の雲厚くうすくに空覆ふ

太陽の光のナイフ冬の雲

冬の日や二階の方が暖かく

帰りにももちろん歌ふ冬の宵

かえりにももちろんうたつふゆのよい
どこかで歌った。お酒を飲んだかは分からない。
が、心地よく歌ったのは間違いないだろう。帰り道でもその楽しい雰囲気のみは残っていて、帰途の道でち歌った、太声か鼻歌かは知る由もないが、随分気晴らしになったと思われる。その気持よさが読者にも伝わってくる。

「歩きながらに歌ひけり」というフレーズがそれを補っているよう。ほかに「太陽の光のナイフ」という句も感受性ゆたかな句であるが、ナイフ以外の物に感じたらいいけれど。と思う。冬雲の間を刺し込んでくる光に感動したのは間違いない。冬の雲を通す陽光の主観写生もよい。

大噓 ◎ 谷口 一献

呑み会もほぼ半ば了へ日を数ふ
後悔のあろうはずなき師走かな
凍空へバラモン凧よ舞ひあがれ
熱爛や話聞かされ知らんけど
大噓して福笑出来上がり
駅伝を倍速で観る四日かな
銘酒呑みそびれて悔し日脚伸び
星の降る街高らかに猫の恋
二階まで冬に埋もれて春を待つ
輪郭のかたし椿の落ちにけり

タジツサ抄

いてふ散華 ◎ 田尻 りさ

柿を食ふ医専工専下宿の子
石垣の隙間より出づ秋の風
枳餅の山の色してをりにけり
開眼のいてふ散華となりにけり
裸木が空を捌きて雨となる
小藪から山茶花こぼれぬる田舎
吊し柿に光集まる旧家かな
エレベーター開くやさんざめく聖樹
天に星地に人波のイブの夜
幼な子のふうはり眠るクリスマス

大噓して福笑出来上がり

おおくさめしてふくわらいできあがり
「出来上がり」というのが面白い視点。これは一献独特の斜に見た景色で、こういうおかしみも俳句の味。福笑いとはおかめやおたふくなどの顔の輪郭を描いた紙の上に目や鼻、口といったパーツを散らし、目隠しをした人がそれぞれを周囲の人の声に誘導させて適当な位置に置いていくゲーム。それだけでもうまく目鼻は出来あがるはずがなく、あと一歩というところで大きなクシャミをして目鼻が息でばらばらになった。これは見物客も予想のしなかつたことで、これこそ福笑いの真髄である。夢風撰。「凍空へバラモン凧よ舞ひあがれ」は寒さなんかには負けるな、という気概の句だが、凧は春の季語となっている。副題に、紙鳶（たこ）、いかのぼり、いか、はた、などがあり戦ののろしの役目も。のちに正月に揚げる風習になったが、中国では春の空を見せて養生するという意味もあったという。（所説あり）一献は今句集出版の準備中。

幼な子のふうはり眠るクリスマス

おさなごのふうわりぬむるくりすます
幼子の句、イエスの誕生を匂わせてクリスマスに相応しい句となった。「ふうわり」とは重さを感じさせないほど軽やかでやわらかなさま。幼子を抱けば重たいが、抱く方の心持ちがふうはりなので幼子の心持ちの何もない軽々とした眠りの状態で、抱いたほうも気持ち「ふうはり」。「開眼の」句。開眼とは新たに作られた仏像や仏画などを堂宇に安置して供養する際に行う儀式のことで、その色折紙で作った花びらを撒く。それに通う銀杏の散る状態が自然の散華であるというのだ。裸木の句、さばきは通常の語だが、元結が切れて散らし髪となったさまの髪のことともいうらしい。そのせいで冷たい雨を降らしたというのだろう。「吊し柿に」の句も「光集まる」が佳い。ただし旧家としたのは過剰演出（余計な飾り）である。もつとシンプルに詠むよう気を付けると佳くなる。「エレベーター」の句もあつと驚く光景が佳い。入院していた時の句であろうか。青木朋子さんから先月の春着の句に感銘したと便りがあつた。